



Title	〈小人書林迷走録〉養豚連環画に迷いたい（1） 戦え、養猪姑娘〈韓梅梅〉：あるいは、張偉は家にこもってからどうなったか
Author(s)	武田, 雅哉
Citation	連環画研究, 9, 133-159
Issue Date	2020-03-10
DOI	https://doi.org/10.14943/2115.98488
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/98488
Type	departmental bulletin paper
File Information	renkanga_9_133-159.pdf



戦え、養猪姑娘〈韓梅梅〉！

——あるいは、張偉は家にこもってからどうなったか

武田 雅哉

20世紀後半、中華人民共和国成立後に描かれた連環画やポスターを眺めていると、〈養猪^{ヤンチュウ}〉すなわち、養豚をテーマにしたものが少なくない。養豚は、すでにひとつの連環画のジャンルを形成しているといっても過言ではないだろう。本稿を綴っている現在、2019年は亥年であり、猪^{ちようりよう}剛鬣八戒先生を敬愛する筆者としては、この機会に養豚連環画の諸相についてまとめておこうという思いに駆られてしまった。今回は紙幅の関係で、建国から大躍進時期くらいまで、すなわち1950年代の作品を、特にこの時期の代表作といえる『韓梅梅^{ハンメイメイ}』を中心に見ていきたい。

清末民国時期の養豚図像

中国人にとっての豚肉の重要性は、清末から民国時期にかけて編まれた教科書や副読本からもうかがえる。1904年(光緒30)の『初等小学堂課本・国文』第五冊の第五十七課は「豕」と題され、「豕^{ぶた}は孕^{はら}んで四か月で出産する。その際、十余匹の子を産むので、繁殖が甚だ容易である」といった文章が見えている。1906年の『高等小学堂理科教科書』、1912(民国元年)の『共和国教科書新国文』第六冊の第五課などでも「豕」の字を使っているが、民国時期の教科書や童蒙書では、「猪」の字が一般化していた⁽¹⁾。

陸仁寿編『猪』(修訂幼童文庫初編、商務印書館、1948)は、連環画形式の副読本だが、その文字テキストには、豚と養豚、豚肉に関する主要な情報が、コンパクトに盛り込まれている。中国の食文化における豚肉の重要性が見て取れるだろう〔図1〕。



図1 『猪』(1948)

家で飼う方法と、外で放牧する方法が図解されている。

養豚従事者の伝統的なイメージ

ここに掲げた絵の画面左がわに描かれているのは、河辺で「牧猪」にたずさわっている少年である。このような男たちは「牧猪奴」などと呼ばれていたが、かれらの仕事は、豚の群を牧草地まで誘導して、草を食べさせるだけではない。いまひとつの重要な仕事に、優良な種豚を、種付けを希望する農家で飼われている雌豚のもとに連れていき、めでたく交配に導くという作業があった。台湾では雄豚を「猪哥」と呼び、これを連れ歩く男を「牽猪哥」と呼んでいた。片岡巖の『台湾風俗誌』には、かれらは「一頭の牡豚を牽きて街巷庄里を廻り依頼に応じて牝豚に交尾せしむるものなり、主として貧困者の老人之行ふ故に人之を賤む、然れども一頭の牝豚に種付をなして二十錢有余の収入ありと云へば、老人としては好箇の職業なるべし」とある^[2]。

豚とはいえ、オスとメスのセックスを手配したうえで、その開始から終了まで、しっかり観察する仕事である。『金瓶梅』の王婆ワンポーさながらのこの職掌は、おのずと、民衆のエロティックな想像力の向かうところともなった。台湾には、「牽猪哥——趁暢チエンチャン」という歇後語（しやれことば）があるらしい。「牽猪哥」たちは、はたから豚たちの交配を眺めることで、みずからも性的な暢しみにたののめり込もうとするわけだが、しょせんは他豚さまの色事を仲介しているにすぎない。そのへんから転じて、「ぬか喜び」「欲望に対して妄想するばかりで、みずからの満足は得られないこと」などを意味するようだ^[3]。

清末の『点石斎画報』に見える「豕人異種」と題された記事は、ある農家で人面の豚が生まれたことを報じたものである^[4]。さらに、その人面豚は、貧しさゆえに妻を持ちえないある男が雌豚と交わったことによって生まれたものらしい、との噂とともに叙述される。これはきわめて特殊なケースではあろうけれど、エロティックな哄笑は、人獣の交わりという卑俗の極地にある物語にまで飛翔していく。博奕打ち、やくざのことを「牧猪奴」といい、博奕ばくちのたぐいを「牧猪奴戯」と称するのも、その職掌が社会的に最下層に置かれていることによるだろう^[5]。

ここで話は二千年ほど前に飛ぶ。中国では漢の時代。えらい御仁が、世に出て名を揚げる前の若き日に、「牧猪/牧豕」という賤業にたずさわっていたというエピソードが、激増するのである。

前漢の宰相である公孫弘こうそんこうは、若いころ家が貧しく、水辺で「牧豕」をしていたというし、隠士の梁鴻りょうこうは、上林苑で「牧豕」に従事していたという。また、後漢の名臣呉祐は、若いころ、長坦沢ちやうたんたくで「牧豕」をしていたし、孫期そんきは大沢だいたくで「牧豕」をしていた。同じく後漢の尹勤いんきんや楊匡ようきやうらの儒者たちもまた「牧豕」にたずさわっていたし、承宮しょうくうは、家貧しく、八歳にして他人のために「牧豕」をしていた。これらの現象からは、漢代においては、勉学に励む苦学生たちにとって、「牧豕」が、わりとよいアルバイト

トとして成立していたことが予想されよう^[6]。だが、それだけではあるまい。おそらく養豚業は、より広範に行なわれていたはずで、たまたまこうして記録に残された者たちは、あくまでも例外的なケースだ。「牧豕」にともなう卑賤なイメージゆえに、かれら偉人たちの伝を綴るにあたって、いまだ雌伏に甘んじていたころの「牧豕」は——それが史実であったとしても——その後の、儒者や宰相としての「大成」と好対照をなす修辭として、好んで用いられたとも考えられるだろう。



図2 吳友如「海上牧豕」

公孫弘の「水辺での牧猪」を謂う「海上牧豕」の四文字を画題として、吳友如が描いた絵がある〔図2〕。それが牧歌的でもあり、また卑賤でもある、パツとしない賤業であるがゆえに、将来の大人物が世に出る前の苦勞嘸として、うってつけなのであった。

建国初期の養豚と連環画

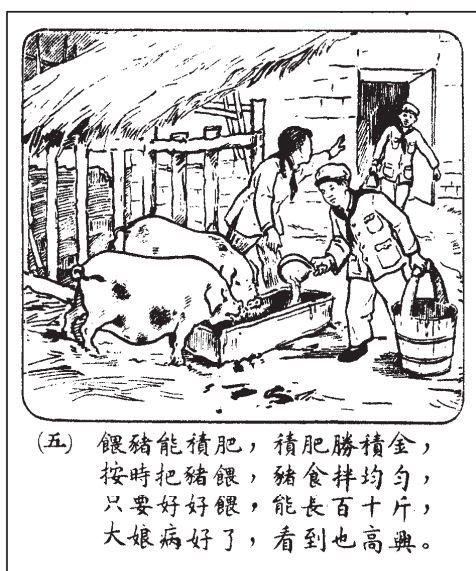
中華人民共和国建国後、豚肉の増産については、さまざまな政策が行なわれていた。「中央人民政府政務院による1952年の農業生産に関する決定」（1952年2月）、周恩来による「国務院による生猪増産に関する指示」（1955年12月）などが、そうである^[7]。

1958年、大躍進と人民公社化の運動が始まると、「猪多糧多、糧多猪多」のスローガンが叫ばれる。特に力が入ったのが、亥年の1959年10月31日に毛沢東が発した「養豚業の発展に関する書簡」であった。ここで毛は、これまで家畜といえば「馬、牛、羊、鶏、犬、豕」であったが、「猪、牛、羊、馬、鶏、犬」とあらためて、猪を主位に置くのが妥当であろうと主張している。これを承けて、「養豚業は大きな発展をさせなければならない——豚は六畜のトップなり」（1959年12月）、「養豚業は堆肥を増やすのに注意しなければならない」（1960年9月）などが、『人民日報』に掲載されたのであった^[8]。この時期、『連環画報』に掲載された養豚に関連する作品もまた、少なくない。そのいくつかを見てみよう。

「養猪積肥」（『連環画報』1952年第21期）は、一文が編文を、（劉）繼貞が絵を担当している。養豚の目的は、豚肉の供給だけでなく、豚の糞から肥料を作ることにもあった。このタイトルは、養豚によって肥料を作り出すことを意味している。わ

ずか9コマの作品であり、ストーリーと呼べるほどのものは特になく、養豚に専念している呉老五が把握している養豚のコツ——豚小屋の作り方、餌の作り方、堆肥の作り方、病気の予防など——を紹介しながら、そのまま養豚マニュアルとして読めるようになっている。

「三個少年兒童隊員」（「三人の少年兒童隊員」『連環画報』1952年第25期）は、苗毅征が詞、龍廷霸が絵を担当している。農村の病弱なおばあさんの生活を助ける少年兒童隊員の活動を、歌の文句とともに描いたもので、中国の少年兒童隊員や少年先鋒隊の模範となった、ガイドールの『チムール少年隊』にならったような掌編である。わずか7コマの作品だが、そのなかのひとつのコマに、おばあさんの飼っている豚の世話をする場面が描かれている〔図3〕。



(五) 餵豬能積肥，積肥勝積金，
按時把豬餵，豬食拌均勻，
只要好好餵，能長百十斤，
大娘病好了，看到也高興。

図3 「三個少年兒童隊員」（1952）

『連環画報』1952年第35期には「中国農民代表參觀団看到了社会主義社会」（「中国農民代表參觀団が社会主義社会を目にした」白宇/編、王叔暉、邵国寰、林鏊/集体創作）が掲載されている。これは養豚をすることで幸福な日々を送るソ連の女性を紹介したものだ。

「牧猪奴」たちの連環画

「生猪倉庫主任」（孟凡夏/原作、平易/改編、陳白一・李潤章・鍾以勤・項飛/画、『連環画報』1956年第20期）は、44コマから構成されている〔図4〕。部隊から食品工場に転職させられた潘瑞は、仕事に身が入らない。そこで部署替えを希望したところ、豚の飼育員の任が割り当てられる。「養豚なんかできない」と、最初は拒否したも



39 過去欄里地板上时常有些猪粪，现在打扫干净了。[欄干]作到了，只剩下一个[食飽]的問題。潘瑞就被猪到槽边吃食的时候，站在那里仔細的看者。

40 潘瑞挨个看了，猪都吃不上几口就走了。他想猪食一定是不对它们的口味，他抓了一把用舌头舔一舔，味道又酸、又苦、又臭。

図4 「生猪倉庫主任」（1956）

の、会社の経理から「共産黨員たるもの、なにごとくも学ぶべきではないのか」などと論され、しぶしぶ豚小屋に出向くことにする。多くの豚を死なせてしまうなど、失敗つづきの潘瑞ではあったが、しだいに研究心も芽生え、飼料の改良などとした結果、良い成績を収めることができた、というおはなし。ちなみにこの原作は、別の連環画にも作られ、刊行されていた^[9]。

「猪倌陳玉」（『連環画報』1957年第6期）は、從維熙^{じゅうい き}の原著にもとづいて、吳頌芬が改編し、鉄兵が絵を描いた、全19コマの作品。新たに公社の「猪倌」すなわち豚飼いの責任者になった陳玉の苦勞を描いたものだが、その第1コマと第2コマには、次のように書かれている。

（1） 和平農業生産合作社が養豚場を設けたばかりの頃は、進んで豚を飼おうとする者はだれもいなかった。やっとのことで派遣されてきた「猪倌」（養豚を専業とする者）は、粗暴な性格で経験もなく、餌をやるのも気まぐれなばかりか、豚がいうことを聴かないと、すぐに鞭を振り上げてぶつのであった。

（2） まともに餌をもらえない豚は、肥えていたものも痩せていき、痩せたものは病気になった。生まれる子豚は奇形、血統の正しいソ連の大白猪でさえ、餓死してしまった。ひとびとは猪場を「閻王殿」と呼んだ。

さきほどの「生猪倉庫主任」でも、豚舎には豚をぶつための棍棒が置かれていることが描かれていた。それによって傷つけられた豚は、もはや肉としても売れない。潘瑞は、言うことを聴かない豚をやたら打ちたがる飼育員を批判し、すべての棍棒を焼き捨ててしまう。このあたりの描写は、当時における養豚場の実態を反映しているのだろう。

「猪倌陳玉」のほうでは、新しい養豚場の建設を申請していたものの、上司の無理解から、大量の豚が凍死する事件が起きてしまう。怒り狂った陳玉は、死んだ豚を背負って公社に怒鳴り込み、改革を訴える。これが功を奏し、養豚場が建設されることになる〔図5〕。これらはいずれも、男の養豚従事者「牧猪奴」たちの、現代における物語である。



図5 「猪倌陳玉」（1957）

養猪姑娘の誕生

時間は前後するが、1956 年第 9 期の『連環画報』には「^{ヤンチュウクーニヤン}養猪姑娘」と題する、17 コマから成る連環画が掲載された（沈平苑・蔣格菲・辛易/編絵）〔図 6〕。

「^{カギンフー}華銀鳳は、旧社会に^{トンヤンシー}おける童養媳でした。解放後、共産党は彼女を苦難から救いました。まずは村の幹部になり、1953 年には、東陽農場に派遣されて、飼育員になりました」という第 1 コマと、「華銀鳳は浙江省の養豚模範となりました。1954

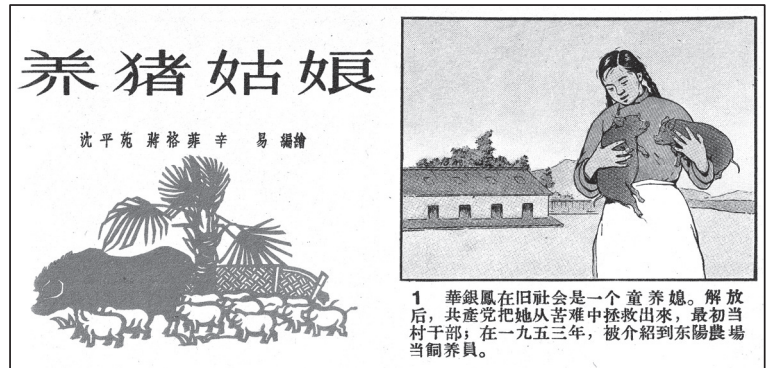


図 6 「養猪姑娘」（1956）

年には、光栄にも中国共産党に参加しました。そしていま、彼女は、全国先進生産者代表会議の代表に選ばれたのでした」で締められる第 17 コマのあいだには、さまざまな養豚上の苦難のエピソードが挟まれている。典型的な模範労働者の出世譚である。

「生猪倉庫主任」も「猪倌陳玉」も、主人公の飼育員は男だったが、「養猪姑娘」は、言うまでもなく、そのような作業に従事する若い女性のことである。本稿の冒頭で触れたように、エロティックで卑賤なイメージとともに語られてきた「牧猪奴」や「牽猪哥」の女性版なのである。

女性の養豚従事者は、古来、ふつうに存在していただろうし、これを描いた連環画は、「養猪姑娘」以前にも見られた。『連環画報』に限れば、「暴同花」（湘一/改編、齊仁/画。『連環画報』1953 年第 5 期）は、強いられた旧式の結婚によって、嫁入り先の家族からいじめぬかれたあげく、自殺をも図った主人公が、新婚姻法によって救われる物語だが、みずからの意志で豚を飼うというエピソードがある〔図 7〕。また「七嬌と全勝婆」（郭同江/編絵。『連環画報』1955 年第 7 期）については



図 7 「暴同花」（1953）

田村容子氏の論考に詳しいが、養豚に従事しているのは、いずれも、かつての「姑娘」である。「姑娘」の意味するところは「若い娘」で問題はないだろうが、この時代における「姑娘」の定義のひとつとして、女性の知識青年というくくりができるだろう。

『韓梅梅』に見る養豚ヒロイン

建国初期に刊行された「養猪姑娘」テーマの連環画で、もっとも読まれ、かつ典型的なストーリーとされた作品は『韓梅梅』かもしれない。

この連環画は、馬烽が1954年6月29日の『中国青年報』に発表した書簡体小説「韓梅梅」を改編したものである。作者の馬烽(1922～2004)は、本名馬書銘、山西省の農民の家に生まれ、16歳で八路軍に参加し、共産党に入党した。1940年には延安の魯迅芸術学院で学び、創作を始める。小説やルポルタージュで知られる作家で、趙樹里を筆頭とする「山藥蛋派」と称される山西省出身の作家群のひとりである。連環画との関連で言うならば、馬烽の原作による連環画は、わりと多いほうだろう。章回小説のスタイルをもちいた代表作の『呂梁英雄伝』(1949)は、連環画に改編され、広く読まれた。そのほかの農村を舞台にした掌編についても、連環画になっているものが多い。

今回、原作のテキストとして参照したのは、中国青年出版社版から1955年に刊行された『韓梅梅』だが、これは、わずか26頁の単行本で、秦耘生と楊永青が、8点の挿し絵を添えている〔図8〕。本作は、中国作家協会編『児童文学選』(人民文学出版社、1956)にも収められ、文革後には、少年兒童出版社編輯『1949-1979 上海兒童文学選』(少年兒童出版社、1979)をはじめ、いくつかの作品集に収められている。これらのアンソロジーに収められたテキストも参照したが、文字の異同は特に見いだせなかった。

小説「韓梅梅」の内容を、55年版の単行本に見える「内容提要」に従って説明するならば、以下のようである。



図8 馬烽『韓梅梅』(1955)

高級小学校の卒業生である韓梅梅は、中学の受験に失敗した。家族や村人から「ダメなやつ!」と白い目で見られるが、「中学に落ちたら生産に参加しなさい。こんなにちの新しい社会では、どんな仕事であろうと前途がある。仕事をきちんとやりさえすれば、祖国の建設に貢献できる」という先生のことばを信じ、農業生産合作社で養豚の仕事を担当することになる。苦しい作業を克服し、新しい養豚の方法を研究して、ついには大きな成果をもたらした梅梅は、労働模範に選出される。もはや家族にも村人にも、彼女をバカにするものはいない。そればかりか、

みんな彼女から新しい養豚の経験を学ぼうとするようになる。やがて梅梅は、さらなる技術を学ぶべく、国営農場に派遣されることになる。

この物語の背景には、1953年12月3日の『人民日報』に掲載された、「高級小学校の卒業生を組織して農業労働に参加させよう」と題する社説と、「山東省蓬莱県潮水郷の高級小学校卒業生による農業生産参加状況の調査について」なる記事をきっかけとして始まった、初級中学および高級小学の卒業生に向けられた労働教育があるという。これは、その後の文化大革命時期における上山下郷運動にいたる、知識青年——ここでは初等教育を受けた者——による下放運動の始まりとなった。

そのような風潮に乗せられて、「韓梅梅」は、発表されるや、『中国少年報』や『人民文学』をはじめ、多くの雑誌に転載されたほか、単行本も何種か刊行され、話劇、評劇、秦腔、鼓詞、花鼓戲、そして連環画などにも改編され、多様なメディア展開がなされた。また、リライトされたうえ、「三封信」と改題されて、小学校の教科書にも掲載されているという^{〔10〕}。

原作は、「我」の語りから始まる。「我」は、知人である小学校の女教師呂萍^{りょへい}から、創作のためのいい題材があると言われて、韓梅梅という卒業生が呂先生に送ってきた何通もの手紙を渡される。呂先生は、これから授業があるといって出ていったので、「我」——呂先生からは「老馬」^{ラオマー}と呼ばれる——は、渡された手紙に読みふける。以降、手紙の文面が、そのまま紹介されるという構成であり、「我」すなわち作者の馬烽自身は、韓梅梅をめぐるストーリーの展開にはタッチせず、あくまでも観察者という立場である^{〔11〕}。

手紙からは、養豚という辛い仕事を任された梅梅が、さまざまな困難を克服しながら成長していく様子が、ありありと看取された。読み終えた馬烽は、「この手紙そのものがなかなかいい文章だから、このまま新聞社に送ればいい」と、絶賛する。

	刊行年月	作者等	出版社	初版印数
①	1954年12月	牛兒/改編、蔡雄/画	江蘇人民出版社	5000
②	1955年01月	盧光照/改編、閻素等/絵	河北人民美術出版社	16100
③	1955年02月	王蘭/詞、李亨芳/絵	山西人民出版社	1300
④	1955年02月	朱先立/改編、張宇・楊春生/合作	遼寧画報社	36000
⑤	1955年02月	黄一德/改編、盛賢亮・楊錦文・王一菲/画	新美術出版社 (上海人民美術出版社)	64000
⑥	1955年04月	陳犀/改編、胡子淵/作画	四川人民出版社	2000
⑦	1955年06月	卓間漁/絵	貴州人民出版社	5000

「韓梅梅」の連環画への改編であるが、『全国総書目』などの出版リストから見るかぎり、1954年から翌年にかけて、『韓梅梅』のタイトルを付した、少なくとも七種類の連環画が世に送り出されている（表を参照）。話題となった小説などが、ほぼ同時期に複数の出版社から、それぞれ連環画に改編されて出版されることはよくあるが、この事実は、やはり注目すべきかもしれない。

いま、手に取ることができたのは、④の遼寧画報社版（以下「遼寧版」）である〔図9〕。参照した遼寧版は、国立国会図書館の所蔵になるものだが、奥付には、「開本：787×1092 1/50」「印張：1 6/25」とあるから、全62頁。巻頭に扉1頁と「内容概要」1頁が置かれ、作品部分が全59コマ、巻末の1頁は『天羅地網』という連環画の広告に充てられている。また「印数：



図9 遼寧版の連環画『韓梅梅』（1955）

76,000—86,000冊」「1955年2月第一版・1956年4月第七次印刷」「定価：一角六分」とある。表中の作者等の記載は、扉に見えるものだが、奥付のほうには「绘制：楊春生、張宇」とだけ書かれている^[12]。

編文の朱先立^{しゅせんりつ}は、50年代から60年代にかけて、東北画報社、天津美術出版社、河北人民美術出版社などで編文（改編）を担当した人物のようだ。

張宇^{ちやうう}と楊春生^{ようしゅんせい}は、やはり50～60年代に遼寧を中心に仕事を展開していた絵師である。張宇は、1930年、吉林省の扶余で生まれた、年画、連環画画家。『東北画報』美術編集、遼寧美術出版社の美術編集、副編審等を歴任している。連環画作品には、『漁夫和金魚』（1953）『保衛延安』（1955）『二虎子』（1958）『越撲越旺的烈火』（1960）などがある。封面だけの仕事も多いようだ。

楊春生は、1932年、遼寧省錦県生まれ。年画・連環画画家。冀察熱遼聯合大学魯迅芸術学院美術系、および東北魯迅文芸学院美術系を卒業後、東北画報社、遼寧画報社の美術記者、美術創作員を歴任する。文化部、国家新聞出版署から「優秀編輯獎」を授与されている。その年画や連環画は、しばしば全国美術展覽会に入選し、いくつかの賞も獲得している。1950年代から、『不平坦的道路』『工農聯盟井』（1957）『民族英雄楊靖宇』（1959）『龍生和海姑』（1960）『苦児擒匪記』（1996）など、多くの連環画を世に送っている。

遼寧版の連環画では、馬烽と呂先生が出てくる冒頭と末尾を取り去り、手紙の内容のみを叙事の対象とし、書簡体という様式もまた無視している。

最初のコマでは、小学校で学ぶ韓梅梅が描かれている。呂先生が生徒たちにむかって、「工場の仕事であろうと農村の仕事であろうと、いずれも光栄なもので、前途があるものなのよ」と説いている〔図10〕。

男子生徒の張偉と一緒^{ちやうい}に中学を受験し、合格発表を見に行った韓梅梅だったが、ふたりの名前はどこにも見つからなかった。張偉は落胆のあまり「わあッ！」と泣きわめき、村への道を、人びとに注目されながら駆けぬけていった〔図11〕。

それを見送った梅梅だったが、彼女だって落第のショックは大きい。それでも、「中学に落ちたら農業生産に従事すべきよ」という呂先生のことばを思い出して、決心をかため、前向きな梅梅であった。

しかし世の中は甘くない。村に戻ったとたん、口の悪い皮肉屋の李玉清からは嫌味を言われるし、家族はさらに冷たかった。母親はおろおろして、大きなため息をつき、祖母はフンと鼻を鳴らす。父親は、一人娘の梅梅には、勉強して相応の社会的地位を得てほしかったのだが、その夢が破れたショックと怒りに体を震わせながら、「あきれたもんだ！」と怒鳴るだけ。こうなっては、梅梅も泣くしかない。これからは農業に参加するんだと宣言はしたが、「いったい、なんのために学校に行かせたんだ！」と、父の怒りの火に油を注ぐだけであった〔図12〕。



図10 『韓梅梅』第1コマ

呂先生の薫陶を受ける韓梅梅ら、知識青年



図11 『韓梅梅』第2コマ

落第を知った張偉はショックのあまり泣いて駆け出す



図12 『韓梅梅』第10コマ

なんのために、おまえを学校にやったんだ！

さっそく農業社（農業生産合作社）に相談した梅梅は、みんなが嫌がる豚の飼育員になった。張偉も誘ってみたが、「そんなのメンツ丸つぶれ！」と返すので、「どんな仕事だって祖国のためになる」と主張するが、激しく拒否されてしまう。

豚小屋での現実、さすがに厳しかった。社では 46 頭の豚をひとつの猪圈で飼っていたが、豚の体は汚物まみれで、悪臭が鼻を突く。だれもやりたがらないはずだ〔図 13〕。

最初はしんどかった梅梅も、なんとか慣れてきた。ほんとうに辛いのは、むしろ周囲の反応であった。みんなは養豚を嘲笑するし、父と祖母は、ますます冷たくあたる。梅梅も、日に日に気分は落ち込んでいく。

ある日、団支書（中国共産主義青年団支部委員会書記）であり、また農業社の会計でもある張潤年から、「まわりは勝手なことを言うものだ。でも、がんばって仕事をやり遂げれば、いつの日か、みんなもわかってくれる」と励まされる。

その夜はベッドに入っても、「なにがあらうと、落ち込んでいる場合じゃないわ！ どうやったら豚たちを、ちゃんと育てられるかしら！」との思いに、梅梅は興奮して眠れなかった〔図 14〕。

また、学校にいた時に、ソ連の画報で見た養豚事業のことを思いだし、まずは豚小屋の衛生環境を改善しようと決意する〔図 15〕。



図 13 『韓梅梅』第 19 コマ
実際の豚小屋は臭くて汚いものだった



図 14 『韓梅梅』第 23 コマ
あたし、がんばるわ！ 興奮で眠れない梅梅



図 15 『韓梅梅』第 24 コマ
ステキなソ連に学ぶのよ！

梅梅は、さっそくその計画を昔からの飼育員の雲山爺に提案するが、「豚ごときに衛生なんていらんわい!」と一蹴される。雲山爺の説得に失敗した梅梅は、それでもあきらめず、古い新聞をひっくりかえして、養豚の科学知識や事例が書いてある記事を集め、熱心に雲山爺を説得した結果、ついに雲山爺も同意してくれた〔図 16〕。

さらに張潤年に相談したところ、清掃計画に賛同してもらい、人員の確保にも協力してもらうことになった。

清掃を手伝う人も増えて、豚小屋は一新し、悪臭も消え、周囲の者たちも、少しずつ梅梅の活動を理解してくれるようになった〔図 17〕。

その後、張偉は、ひそかに太原に行き、省政府のもとで仕事を果たらしい。そのことを知った梅梅の父と祖母は、ますます冷たいことばをかけてくるようになった。

梅梅の養豚は、ある程度までは成功したが、それで満足はしなかった。さらに呂先生が送ってくれた養豚関係の本を読んで知識を広め、雲山爺をも説得し、こんどは飼料の改革に取り組むことにした。

梅梅の養豚改革は成功し、だれもが彼女を称賛するようになった。あの皮肉屋の李玉清も、これまでの言動を梅梅に謝罪し、効果的な養豚方法を質問してくるようになった〔図 18〕。

張偉とはいえば、政府の機関で用務員になったが、パツとしない仕事だというので、やめてしまったらしい。



図 16 『韓梅梅』第 27 コマ
新聞から雲山爺を説得する資料を探す



図 17 『韓梅梅』第 32 コマ
最近、豚小屋の臭いも消えたわねえ



図 18 『韓梅梅』第 44 コマ
いままでゴメンね。いろいろ教えてちょうだい

秋の収穫が終わり、大きな成果を挙げた梅梅は、社員大会で生産模範に選ばれた。梅梅の母は一足先に家にもどると、このことを父に伝えた。

「おとうさん、うちの梅梅が模範労働者に選ばれたのよ！」

さらに社の主任が家にやってきて、県からの通知で、梅梅に、省の農場で研修を受けさせることになったと告げる。梅梅はこれを聞いて、跳び上がらんばかりによろこび、母と祖母もよろこびを分かちあう。

あくる日の朝、出発にあたり、父は梅梅の手を握って、こう言う。

「梅梅、おとうさんは、おまえに悪いことをした。この何か月のあいだ、おまえに対して……」〔図19〕。

みんなが梅梅を送ろうとすると、太原から帰ってきた張偉とばったり遭遇した。疲れるし、自由もないので、仕事はやめてしまったという。

梅梅は馬車で旅立っていった。みんなは、よろこびの中、手を振って彼女を見送った。ただ張偉だけは、頭を低くたれて眉間にしわを寄せていた。おしまい〔図20〕。

ちなみに、⑤の新美術出版社版（以下「新美術版」）〔図21〕は、現物は見られないものの、2002年に上海人民美術出版社から刊行された新装版がある^{〔13〕}。こちらのコマ数は73コマあり、遼寧版よりもコマ数が多いためか、原著の文言をそのまま使って再現している部分が、より多くなっているようだ。



図19 『韓梅梅』第56コマ

梅梅、とうさんを許してくれるかい？

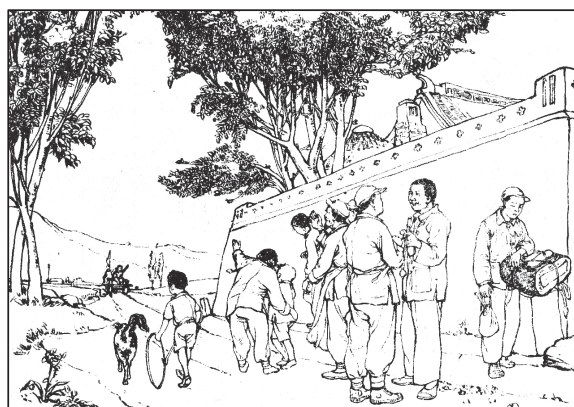


図20 『韓梅梅』第59コマ

梅梅、いつてらっしゃい！ 張偉、おかえりなさい！



図21 新美術版『韓梅梅』

養豚業は臭くて汚い仕事

以下、遼寧版の連環画『韓梅梅』を中心に、いくつかの気になるモチーフについて検討してみよう。

この時期の養豚連環画を読んでいると、養豚は汚い仕事であり、これにたずさわる者も、おのずと下賤の者たちであるとの偏見が存在していたことが提示されている。そのために周囲の人間たちは、しばしば主人公の選択を理解してくれない。

まず、養豚場が悪臭に充ち満ちていることが提示されている。梅梅の仕事場は、46頭の豚がひとつの柵の中に閉じこめられ、どこもかしこも糞尿、汚水、腐泥で満ち、堪えられない悪臭が漂っているというものであった。養豚業が臭い仕事であることは、この仕事が賤しい仕事と見られてきたことの大きな理由でもある。

遼寧版の連環画『韓梅梅』では省かれているが、原作の『韓梅梅』に見える描写を紹介しておこう。梅梅が養豚の仕事を決めた時、先輩飼育員の雲山爺が、「あの臭さじゃ、あんたはきつと逃げ出すさ」と言うと、梅梅は、「あなたが逃げ出してないのなら、あたしも逃げないわ!」と、固い決意を表明する。

さらに原作では、養豚に成功した梅梅が育てた豚が、中秋節にさばかれて、みんなの舌と胃袋を楽しませる場面がある。ここでは梅梅がおもしろい所感を述べている。

「私はその日、この手で育てた豚が殺されるのを見て、胸中、いささか辛いのを、おさえられませんでした。あとになって考えれば、われながらおかしいのですが、豚はもともと、その肉を人に食べられる動物ですからね。殺さないまま、隠居させてどうするのってはなしですよ」(20頁)。

手塩にかけて育てた食用の家畜に情が移ってしまうという、あの、映画『ブタがいた教室』(2008)のジレンマも、梅梅は難なく克服したようだ。

家族はわかっちゃくれないの

だが、真に梅梅を苦しめたのは、悪臭そのものよりも、周囲の人間たちの冷たい視線とことばであった。

『韓梅梅』の原作において、韓梅梅の大きな苦悩は、家族、特に父親との確執である。じつさいのところ、梅梅は、むしろ新しい考えを持った両親に育てられてきたといつてよい。家族の期待を一身に背負って育てられ、小学校にも行かせてもらったのだ。父親は、「おれは乞食をしたって、おまえに勉強させてやるんだ。いまのような男女平等の世界では、能力があれば、女だって大きな仕事ができるのだ」(2頁)と豪語するくらいの、一見、開かれた考えの持ち主なのだ。だが、それこそが梅梅と父親とのあいだに横たわる大きな溝であり、彼女を苦しめる元凶になった。

梅梅の落第を知り、これから農業に従事したいという意志を聞かされた父は、おりしも食事中、茶碗を投げ出し、怒りで体を震わせながら、「大恥かかせられた! さ

んざん勉強させたあげく、百姓をやるつか！」「賤しい仕事をしやがって！」と娘を怒鳴りつける。

そんな父親とは対照的に、祖母は古い考え方の代表者であるが、父とは別の意味で梅梅を非難する。フンと鼻を鳴らした祖母は、「だから言ったんだ。女にや学問なんかいらんのだってね。五、六年も勉強させて、とんだ無駄づかいだよ！」（6頁）、
「嫁入り前の娘が畜生あいてだなんて！ 恥しらず！」（12頁）。

はじめに触れたように、豚を飼うという作業が、その交配をかたわらで援助する仕事まで含まれていたことを思えば、祖母が発した「嫁入り前の娘が……」は、じゅうぶんに納得のいくものであったろう。

1959年の『中学生飼養員』（「中学生が飼育員になる」1959年12月、上海人民美術出版社）は、まさに『韓梅梅』モデルに属する物語の連環画である〔図22〕。上海の初級中学を卒業した^{ちやうけいてん}趙敬霑なる娘さんは、農業生産に参加すべく下放したものの、農業社の主任から養豚の仕事を割り振られ、絶望的な気持ちになる。あてがわれた先達は、小学校も出ていない農民。彼からいったいなにを学べというのだ？ 豚小屋に行ってみると、あまりの臭さに堪えられない。

仕事を変えてもらおうとする趙敬霑だったが、主任に諭され、いまいちど豚小屋に行ってみる。すると、先達がいろいろ教えてくれた。なにもかも学校で習わないことばかり。先達から「豚を広場に連れていき、交配して下さい」と言われた趙敬霑だったが、あろうことか、雌豚二頭を連れてきてしまった。自分には、豚の雌雄を弁別する知識もないのだ！ と、深く反省した趙敬霑は、はじめて「お師匠さま！」と呼ぶのであった。めでたし、めでたし！

趙敬霑は、まさしく韓梅梅の歩いた道を、正しくなぞっているわけだが、上海出身の彼女は、農村育ちの梅梅ほどは「おおらか」ではないので、悩みもそれなりに大きかったようだ。いずれにしても、養豚に従事するからには、豚の交配の仕事もまた、かれら年端も行かぬ少女たちに託されていたことは、確実であろう。

梅梅の祖母と父親は、女子教育については、ある意味で正反対の考えの持ち主であるにもかかわらず、いざ娘が落第したとなるや、一致団結して、非難の集中砲火を浴びせる。両者のはざまにある母親は、梅梅に同情はするが、特に積極的な行動に出ることはなく、大きなため息をつくばかりだ。



図22 『中学生飼養員』（1959）

これら家族の反応から、父親が梅梅を学校に行かせてくれたのは、知識人となっていていい仕事にありつき、楽な暮らしができるだろうという、打算のゆえだったらしいことを知った梅梅は、しょせんは兩人ともに「旧思想」の持ち主であったことに悲しくなってしまう。

梅梅と家族のあいだの反目は、互いに目を合わせない会話、画面では向こうをむいて、背を見せたままの配置などで表現されている〔図23〕。



図23 『韓梅梅』第5コマ

失敗した者に対する、家族の冷たい視線

勝手なことを言う女たち

村一番の知識人であるべき梅梅の落第と養豚に対する村人たちの反応も、なかなかおもしろい。特に、口の悪い李玉清という女は「おやおや！ あたしたちの女秀才が焼け焦げちゃったねえ！ ひひひ……」〔図24〕と嘲笑したり、梅梅が養豚場をきれいに改良したのを見ても、「新任のお役人が、三回たてつづけに火をつけるようなもんさ」（真是新官上任三把火呀！）と言って諷刺する（第33コマ）。



図24 『韓梅梅』第4コマ

皮肉屋の李玉清による、しつこいいじめ

これは、『三国演义』の諸葛亮が、劉備の軍師になってから、たてつづけに「火焼博望坡」「火焼新野」「火焼赤壁」の大仕事を遂げたことに由来する諺語だが、ここでは「がんばるのも、どうせ最初だけ」といった意味である。また、遼寧版にはないが、原作では「豚小屋を金鑾の御殿に作ったところで、豚がお姫さまに変わるわけじゃあるまいし！」（17頁）などとも言っている。

近所の農婦たちも、高級小学校の卒業生ともあろうものが養豚なんかに従事していることに対して、「まったく、ふがいないわねえ！」と陰口をたたく。

これが、梅梅のたゆまぬ努力の甲斐あって、しだいに理解を得るようになっていくのだが、それはそれで、民衆の勝手なコメントが飛び交っている。養豚場がきれいになって悪臭が消えると、「いまじゃ、豚小屋のそばに住んでいる私たちも、臭い思い

をしなくて済むようになったわねえ」といった様子〔図 17〕。最後には、あの李玉清さえも、「梅梅同志、これまではみんな私が悪かったわ。あなたのところの豚は、どんな飼育をしているの?」と、手のひらを返したように「良き理解者」になってしまうのである〔図 18〕。

「女にゃ、学問なんか知らないんだ」と主張していた祖母も、梅梅が労働模範に選ばれ、省に招かれるという輝かしい栄誉を獲得したあとは、梅梅を抱きしめて、こう言うのである。

「おまえはほんとうに、おばあちゃんのいい孫だよ。おばあちゃんと同じで、負けず嫌いなんだよねえ」と〔図 25〕。

このばあさん、若いころは、なかなかの食わせものだったのかもしれない!

いっぽうで、早く娘を褒めてやりたいのだが、なかなか祖母のように口がうまく動かせない父親の背中が、まことに寂しげである。人間どものつまらぬ事情など知ったことかというていで、まるくなって寝ている猫が、じつに効果的である。

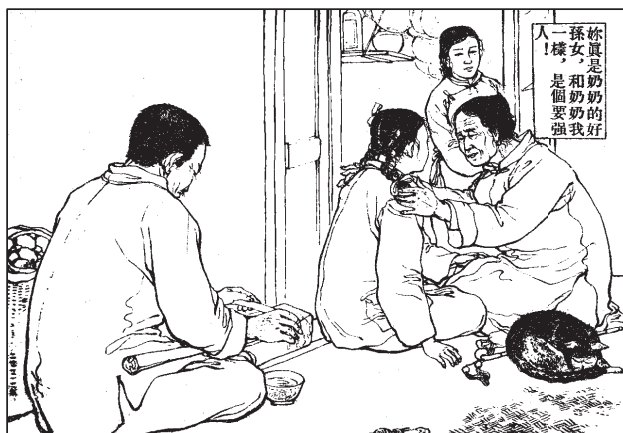


図 25 『韓梅梅』第 52 コマ

おばあちゃんは、いつも無敵だ

良き指導者と頑固な先達

知識青年を主人公にした物語において、必須とも言える存在が、「良き指導者」であろう。このタイプは、壁にぶつかった主人公を力づけたり、いいアイデアをさずけるなどの役割を持つ。梅梅にとっての良き指導者は、団支書であり、また農業社の会計でもある張潤年であった。

また、梅梅が、科学にもとづいた新しい養豚の方法を導入するにあたり、なにかと障害となるのが、いささか頑固な飼育員の先達、雲山爺である。彼女が養豚場の清掃と大改造を提案すると、「そんなもんいらねえ」と一蹴するのだが、梅梅が新聞に載った養豚の成功例の報告を集め、「ほら、新聞にも載っているよ」と見せつけると、「新聞に載っているからには、ほんとうなんだ!」と、あっさり説得されてしまう。

さらに、豚の餌の改良を提案した時にも、いったん反対はするのだが、実践をまのあたりにして、同意することとなり、母豚が子豚を圧死させないように、交代で夜通し見張りをするなど、世代を超えた二人の養豚家は、心をひとつにするのであった。

トラクターのポスター

遼寧版の連環画で気になるのが、韓家の壁に貼られている一枚のポスターだ。部分的なものを入れると、9、21、34、53、54、55の各コマに見えているが、第34コマに見えるものからは、その全体の構図が見て取れるだろう〔図26〕。

絵画の中に、いまひとつの絵画を、オブジェとして描き込む「画中画」の手法については、中国では古くからその伝統が見いだされるが^{〔14〕}、中華人民共和国になってから作られたポスターなどにおいても、しばしば用いられているものだ。

トラクターをモチーフとしたポスターは、この時期、大量に描かれていた。さらに、トラクターをモチーフとした場合には、そのほとんどがソ連に由来する「女トラクター運転手」というテーマのもとに描かれていた^{〔15〕}。

この連環画において、韓家の壁に貼られているポスターは、王冠^{おうかん}が描いた『当她經過母校的時候』（「彼女が母校を通った時」1954）と題するポスターであり、まさにその当時、実際に刊行されていたものであった〔図27〕。画面左の



図26 韓家の壁に貼られたポスター（第34コマ）



図27 王冠『当她經過母校的時候』（1954）

アーチ型の門には「里仁村完全小学校」と見える。トラクターを運転しているのが、タイトルにある「彼女」であり、運転席から身を乗り出して、トラクターの左側に立つ女教師と握手をしている。おそらく、小学校時代の恩師なのだろう。トラクターをひと目見ようと、学校の生徒たちが集まってきている^{〔16〕}。

女トラクター運転手は、当時にとっては、ソ連をはじめとする社会主義圏で推し進められた、農業における近代化・機械化に対する讃美のさまざまな事例の中で、もっぱら男の領分であったトラクターという大型機器を女性が操るという、共産党中国が提示した「男女平等」の理想的なヴィジョンのひとつでもあった。「完全小学校を卒業した知識青年が、女トラクター手となって故郷に錦を飾る」という、このポスター

のモチーフは、とりもなおさず、「小学校を卒業した知識青年が、女養豚手となって故郷に錦を飾る」という『韓梅梅』のモチーフと軌を一にしているのである。

張偉は、家にこもってからどうなったか？

ひとり連環画のみの問題ではないが、馬烽の『韓梅梅』において、筆者がもっとも気になるのは、張偉という人物であり、この作品における彼に対する処理にほかならない。まずは一通めの手紙に書かれている、中学受験に失敗した時の張偉の描写を、原作から拾ってみよう。

そのとき張偉は、「ワアッ！」と一声あげて泣き出しました。十六、七歳の男の子が、大きな通りで泣きわめくなんて、まったくサマになりません！ 道をゆく多くの人びとは、立ち止まってかれを見ました。たぶん彼もつらかったのでしょう、こちらに背を向けるなり、一目散に村まで走って帰りました。私も帰りましたが、彼には追いつきませんでした（4頁）。

ここは連環画でも第2コマで、ほぼ原作どおりに描写されている。

張偉のその後については、原作では、二通めの手紙で紹介されている。

張偉は、どうなったと思います？ 彼はあの日、合格発表の掲示を見て家に帰ってから、ずっと外に出ず、人に会うのも嫌がり、一日じゅう家の中で横になったまま泣いていたのです。（中略）さきごろ、私も見舞いに行ってきましたが、顔色はたいへん悪く、目は赤い桃のように腫れていました。私は彼に、農業生産に参加するよう勧めたのですが、頭を横にふりながら、「ぼくには、そんな恥ずかしいことなんかできない！」と言いました。さらに私に向かって、「まさか君が豚を飼うだなんて、思いもよらなかったよ。そのの、いったいどこに前途があるんだい？」と言うのです。私は言いました。「どんな仕事であろうと、すべて祖国に奉仕……」 私が言い終わらないうちに、彼は怒って言いました。「もういい！ ぼくは君みたいに進歩してないんだ。やりたいやつが、やればいいのさ！」私はそのことばを聞くなり頭にきてしまい、身をひるがえして飛びだしてしまいました。あとで、私たちの団支書の張潤年が何度か誘いに行き、社長も勧誘してみたのですが、まったく聞く耳を持ちませんでした（17頁）。

その後、張偉は父親に旅費を工面してもらい、太原に仕事を探しに行ったのだという。太原での仕事ぶりは、張偉の母親に送られた手紙によって宣伝された。

おととい、彼のお母さんが、彼が太原から送ってよこした手紙を手にしなが、村中で自慢をして歩きまわっていました。字の読める人に会えば読んでもらい、字の読めない人に会えば、「うちの張偉は、省の政府で仕事についたのさ！ 省の政府だよ！」と触れてまわりました。その手紙は私も読んだのですが、いったいなんの仕事についたのかは、どこにも書いてありませんでした（17 頁）。

いずれにしても、省政府での仕事とあらば、だれの目にも、立派な体裁のいい仕事と映ったのだろう。父と祖母がこの情報を耳にしたおかげで、梅梅は、とんだとぼつちりを喰うことになる。また、ここに描かれている張偉の母親の、愚かしくもほほえましい行動は、時代を超えても変わらない、典型的な「親バカ」の形象でもあろう。

その後の張偉については、三通めの手紙に言及がある。梅梅たちの努力の甲斐あって、大きく育った豚が売りに出されることになったが、豚を売りに太原まで行ってきた者が、張偉にばったり出逢ったというのだ。

張偉は、はじめ省政府のある部署で用務員をやっていましたが、いまは別の機械工場で仕事をしているのだそうです。彼は、用務員がパツとしない仕事なのが嫌になったのです。彼に言わせれば、それは、他人にかしづくお役所仕事なのだそうです。ここ数日、彼のお母さんは、またしても日がな一日、街に出ては、人びとをつかまえて、こう吹聴しています。「うちの張偉は工場労働者になったのよ。みなさんご存知のように、いまや工人は、いちばん羽振りのいい仕事よね。なんでも、工人は指導者だっていうじゃない！」（20 頁）。

張偉の母親の「親バカ」は、いよいよ激しさを増してきている。そして、ラストでは、栄光の中、みんなに歓送され、村を出発する梅梅と、太原からすすぐ戻ってきた張偉の対比で幕となるのである。

会議が終わった時、路上で張偉とばったり出逢いました。かれは太原から帰ってきたところでした。私たちはみな、大よろこびで駆け寄り、声をかけました。ある団員などは、熱意を込めてこう言いました。「わしらの工人あにきのお帰りだ。おれたちに工場の様子を報告してくれよ！」 しかし張偉は、ひとことも口にせず、家に帰っていききました。あとになって初めて知ったのですが、彼はとくに工場からは離れていて、仕事もやめていたのです。工場労働者なんて、汚いし、疲れるし、自由にならないというので、それで嫌になったそうです。「百姓をしているほうがマシだ！」と言うのです。とにかく、となりの山は高く見えるというやつで、労働を見下しています。このような思想は、まったくよくないと

思います。団ではこれから、彼がこの思想上の問題を解決できるように、ちゃんと手助けをしていく心構えをしたのでした。

呂先生、明日、私は出発します。むこうに着いたら、また手紙を書きます！
敬礼！

あなたの生徒 梅梅 十一月十二日深夜（25 頁）。

これは、梅梅という成功者からの、張偉という失敗者に対する、優しい仮面をかぶった、間接的な勝利宣告とも読める。そもそも養豚ものに代表されるような、知識青年の下放をテーマにした物語に共通するスローガンは、「臭くて汚い、人の嫌がる仕事をやりましょう！」である。本作がその嚆矢であるというわけではないが、『韓梅梅』は、少なくともそのような作品の典型であった。スローガンが必要であったということは、多くの若者が、やはり本心では嫌がったからであって、単純な若者たちの革命的闘志を燃え上がらせるために、この種の美談がおおいに貢献したことは想像にかたくない。むしろ張偉のように、夢を断たれて絶望するもののほうが、大多数を占めていただろう。王再興は、張偉のエピソードを紹介して、「これこそは、当時の教育整頓の時期にあって、人びとが頻繁に目にした、農村の高級小学校卒業生の物語なのであった」という^[17]。作者の馬烽は、その創作の背景について、こう証言している。

多くの高級小学校の卒業生は、みな、農業生産に参加しなかった。みな、つづけて上の学校に進学することを希望した。だれもが、それぞれの理想を持っていた。技術士になりたい、さもないれば、科学者になるんだと^[18]。

また、楊健によれば、「馬烽は、正反二種類の形象を通して、帰郷した知識青年のために、正確な人生の歩むべき道を指し示した。注目すべきなのは、作者は反面人物の道徳における品格に対して、低い評価をあたえていることであり、思想面の批判を道徳面の批判に転化していることだ」^[19]とのこと。

それにしても、この種の小説のプロットとして、その末尾に、敗北者である張偉からの、反省や改心の弁が、ひとこと置かれていると、それなりに落ちつくはずなのであるが、これにはそれがない。みんなでこれからも張偉君を助けていきましょうとの宣言はあるが、それで簡単に救われたことにしてしまうのが、いかにもとってつけたような締めではある。

張偉は、家にこもってから、どうなったのだろうか？ 親バカの母からは、裏切りものとののしられ、口の悪い李玉清からは皮肉を言われ、村の女たちからは白い目で見られ、村の恥さらしと陰口をたたかれながら、ついには積もり積もった鬱憤を晴らさんと、韓梅梅を惨殺してしまうのだろうか？ それとも、家にこもって本を読むだ

けの生活になり、それなりの知識人となったものの、やがて文革が発動されるや、引きずり出されて殺されてしまうのだろうか？ 新中国には、さまざまな意味あいの家を出たノラたちがいたっぽうで、家にもどり、家にこもる男女もいたのだろう。

すこしばかり、連環画の世界から、はずれてしまったかもしれない。いままた連環画にたちかえり、そこ描かれた張偉君の姿を、よく観賞しておこう〔図 28〕。

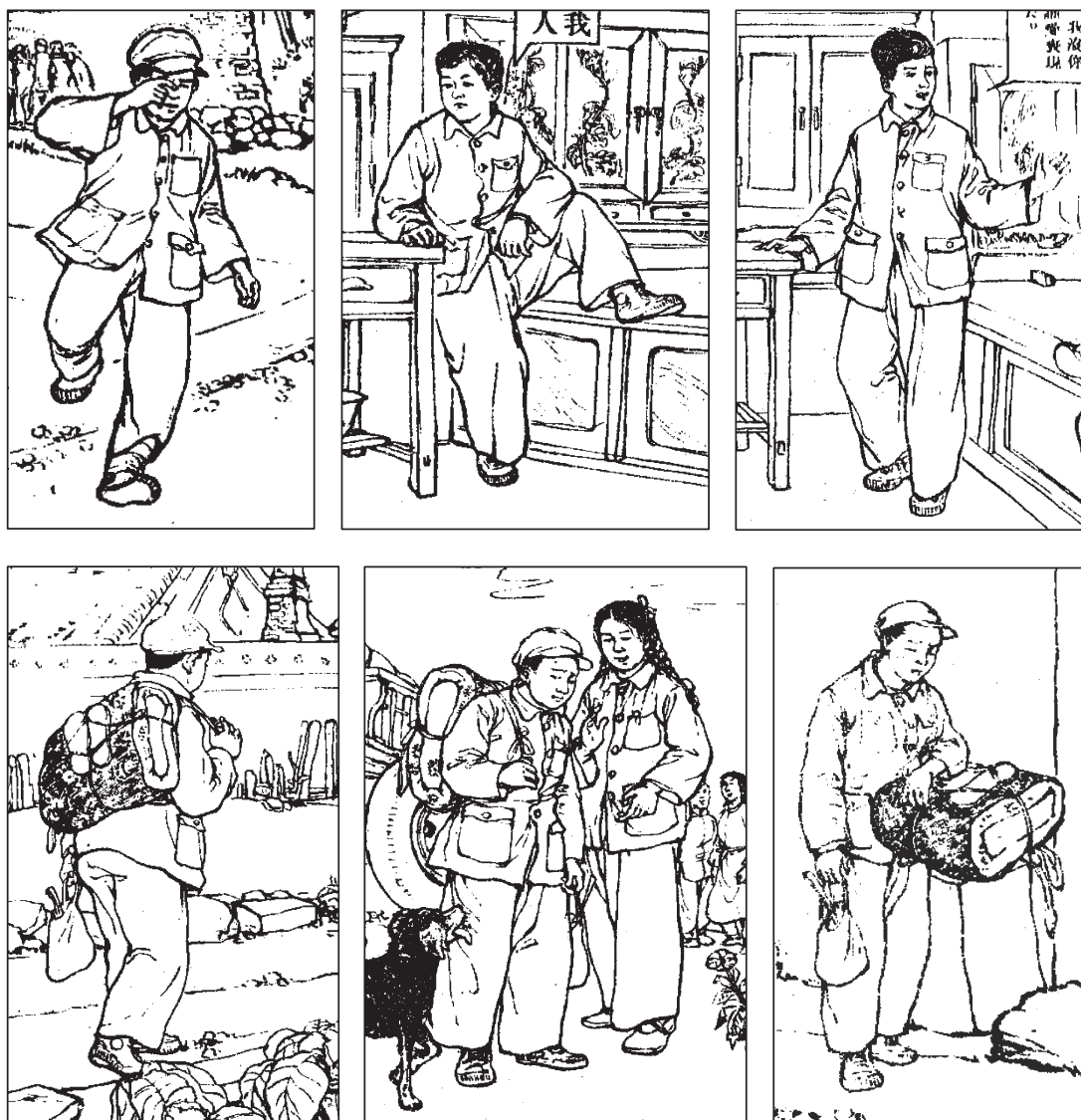


図 28 さまざまな張偉の顔

上段左から、第 2、17、18 コマ。下段左から、第 57、58、59 コマ。

養豚姑娘は増殖してゆく

かくして全国各地で「養猪姑娘」の称号を冠した娘たちが名乗りを挙げていく様子は、まさに雨後の^{たけのこ}筍！〔20〕

これをテーマにした連環画を、ざっと拾い読みしていこう。

写真連環画『養猪姑娘劉金鳳』（遼寧画報社、1958）〔図 29〕の第 1 コマは、「劉金鳳は、復県娘娘宮郷の星火社の養猪員で、今年 19 歳、1955 年に高級小学校を卒業するや、政府の呼びかけに応じて、農業生産に参加しました。仕事がないへん積極的であったので、復県の人民代表に選ばれました。」とある。

『王桂蓮』（杏綿・蘇偉光/原著、章程/改編、育才・言蒂・静林/画。上海人民美術出版社、1959）〔図 30〕の主人公は、豚に限りない愛情を抱いているという王桂蓮。農業社主任の娘でもある。進んで養豚の仕事に従事するが、最大の敵は、またしてもあの、口さがない女たちなのであった。

「あんな小娘に、養豚なんか無理よ！」「できもしないのに無理しちゃって！」

やがて桂蓮が、いい成績を上げたら上げたで、

「養豚なんて楽なものよ。一人であんなに稼いじゃってさ！」

「主任の娘だからねえ。楽な仕事があれば、まずあの子のところに行くわけよ！」

そんな陰口を耳にした父は、いたたまれなくなり、娘の仕事を変えようとする。

「養豚が楽な仕事だっていうのなら、どうして最初に私にさせることに同意したのよ！」と、桂蓮は悔しくてたまらない。

「まあ、空気読めよ……」と、父は無理矢理やめさせたが、新たに養豚担当となった二人の娘は、「こんなきつい仕事、とてもやってらんないっす！」と、一日で辞めてしまった。なんだかんだで、けっきょく桂蓮が最適任者だということになり、ふたたび養豚場に戻る。さらに大きな成績を上げた桂蓮は、省の会議で、その経験を報告することになり、彼女を乗せた列車は発進するのであった。



図 29 『養猪姑娘劉金鳳』（1958）



図 30 『王桂蓮』（1959）

『出色的飼養員』（「ずばぬけた飼育員」張芳鈞・華向朝/原著、嚴華君/改編、李鉄生/絵画。上海人民美術出版社、1959）もまた、千篇一律の「養猪姑娘」ものである。1955年の6月、高級中学を卒業した李銀屏は、大学進学を希望していたが、体格検査に引っ掛かり、受験をあきらめることになった。

情緒不安定のままで村に戻った彼女は、高級中学に入れなかった初級中学の卒業生を集めた学習グループのリーダーを任せられる。その後、養豚事業に関心を持った彼女だが、悪臭との戦い、養豚場の衛生環境の改善、飼料の改良など、お定まりの試練をくぐり抜けて、ついには青年社会主義建設積極分子に選ばれ、さらに1958年6月には、省の人民代表に選ばれ、毛主席の笑顔と五星紅旗を背景に、輝かしい報告をすることになる〔図31〕。

1960年第7期の『連環画報』に掲載された「郭花花」には、こんなキャプションがある。——「郭花花は豚とお友だちになりました。汚いのもいとわず、疲れも恐れず、毎日豚小屋に入っては、豚のからだを洗ってあげます。もう病気の豚なんて出しません」〔図32〕。

こうして、養豚にたずさわる人物は、女性、特に「姑娘」であることが定番となった。賤業のイメージのある養豚に、妙齡の「姑娘」——じっさいには若い奥さんも多いが——を配することによって、若者たちの熱い革命の心を萌えさせる効果がもたらされたであろう。さらに言えば、かくまで濫觴を見た「養猪姑娘」なるものには、進学という未来の夢を断たれ、「情緒不安定」という病に感染した無数の知識青年を救いうる可能性があったのかもしれない。



図31 『出色的飼養員』（1959）
毛主席が見ているわ……



図32 「郭花花」（1960）
郭花花は豚さんとお友だちになったの……

【注】

- 1 趙大川『中国養猪業図史』（杭州出版社、2009）113-114 頁。
- 2 片岡巖『台湾風俗誌』（台湾日日新報社、1921）145 頁、第八章「台湾人の雜業」第九節「牽猪哥」。
- 3 「教育部 台湾閩南語常用詞辭典」の「牽猪哥」の項はこの歇後語を引いて「牽種猪配種，公猪在交配，自己在旁邊看著也快樂。比喻幫人媒介色情，空歡喜，乾過癮。」と説明する。
(https://twblg.dict.edu.tw/holodict_new/default.jsp)
- 4 『点石齋画報』光緒 19 年 1 月 26 日、土五集/36 葉裏-37 葉表「豕人異種」
- 5 『晋書』卷六六「陶侃列伝」。
- 6 蔣波「漢代“牧猪”現象小考」（『古今農業』2013 年第 3 期）参照。ここに列举された人物の伝は、それぞれ、公孫弘は『史記』卷 112「平津侯主父列伝」、梁鴻は『後漢書』卷 83「逸民列伝」、呉祐は『後漢書』卷 64「呉延史盧趙列伝」、孫期は『後漢書』卷 79 上「儒林列伝上」、尹勤は『太平御覧』卷 959 引『東觀漢記』、楊匡は『後漢書』卷 63「李杜列伝」、承宮は『後漢書』卷 27「宣張二王杜郭呉承鄭趙列伝」に見える。
- 7 「中央人民政府政務院關於 1952 年農業生產的決定」（『人民日報』1952 年 2 月 27 日）、「国務院關於増産生猪的指示」（『人民日報』1955 年 12 月 22 日）。
- 8 「養猪業必須有一個大發展——猪為六畜之首」（『人民日報』1959 年 12 月 17 日）、「養猪必須注意多積肥」（『人民日報』1960 年 9 月 29 日）。
- 9 『牲猪倉庫主任』孟凡夏原作、劉一心編繪（河北人民美術出版社、1957 年 11 月）国立国会図書館蔵。
- 10 王再興「合作化小説“個人”故事的講述及其問題——以馬烽和《韓梅梅》為例」（『揚州大学学报（人文社会科学版）』2013 年第 6 期）82 頁。

『人民日報』の記事は「組織高小畢業生參加農業勞働」および「關於山東省蓬萊県潮水郷高小畢業生參加農業生產情況調查」。

張懿紅は、『韓梅梅』について、次のように批評している。「『韓梅梅』は、農村の高小卒業生が、農業生産に身が入らないという現象に照準を向け、かれらに労働教育をほどこすべしという政治的任務に、すみやかに呼応して創作されたものであり、発表されるや、広範な若者たちのあいだに熱烈な反響をもたらし、良好な社会効果を發揮した。そのテーマは明瞭で、構造もまた単純明快である。（中略）テーマは、韓梅梅が積極的に農業生産労働に参加して養豚の名手になるという先進的な業績を通して、申し分なく説明されている。そのうえ、同級生である張偉の、仕事を選び好みして労働を見下すという遅れた思想によって、対照的に補充されている。こうして、謂わんとすることを伝えるという点については、明確かつ完璧ではあったものの、あきらかに、人びとを魅了するだけの芸術性を欠いている。」張懿紅「漸進社会工程的象徴：中国当代小説城郷対立主題的変奏」（『甘肅師範学报』2008 年第 1 期）51 頁参照。

11 馬烽の作品における、語り手としての「我」についての分析は、内藤忠和「馬烽文学における語り—短篇小説を対象にして—」（『島大言語文化:島根大学法文学部紀要（言語文化学科編）』20、2006年3月）を参照。

12 原著『韓梅梅』とともに、貴重な資料の借用を許可して下さった国立国会図書館の、寛大なる配慮に心から感謝する。国会図書館所蔵の連環画の重要性については、中野徹「国立国会図書館関西館〈上海新華書店旧蔵書〉の連環画」（『連環画研究』第2号、2013）

などにも明らかなが、それとともに、この場を借りて、意見を言うことをお許しいただきたい。それは、貴重な書物を保管する使命を帯びた機関として、本というものに、いまして「優しい気持ち」を抱いていただきたいということである。連環画は、表紙がすでに絵画作品の一部であり、本の顔であることは言うまでもないが、その顔に、これほど



図 29 『韓梅梅』（1955）

無造作にシールを貼り付けられたものを目にするのは、悲しいこと以外のなにものでもない。ダ・ヴィンチの画集の表紙に『モナ・リザ』が使われていたら、その顔面を覆い隠すようにシールを貼るだろうか？ 近い将来、しかるべき技術が開発されて、表紙の絵をいささかも損なうことなく、このシールがきれいに剥がされ、韓梅梅の顔がわれわれの前に現われることを望むものである。楊春生の描いた遼寧版『韓梅梅』封面画の原画らしきものがあつたので、ここに載せておこう（「“韓梅梅之父”追憶前塵往事 楊春生：用我的深情画母親」『沈陽晚報』2013年12月10日）。

13 新美術出版社は、1956年1月に上海人民美術出版社に併合された。新装版『韓梅梅』には「上海人民美術出版社1955年6月第1版」に拠った旨の注記がある。

14 ウー・ホン『屏風の中の壺中天——中国重屏図のたくらみ』（中野美代子・中島健訳。青土社、2004）を参照。

15 中国および共産圏におけるトラクターについては、W・ヒントン『鉄牛——中国の農業革命の記録』（加藤祐三・赤尾修共訳。平凡社、1976）、鍵藤原辰史『トラクターの世界史——人類の歴史を変えた「鉄の馬」たち』（中公新書、中央公論新社、2017）を参照。

16 鄒躍進編『毛沢東時代美術（一九四二至一九七六）』（湖南美術出版社、2005）374頁。

- 17 前掲、王再興「合作化小説“個人”故事的講述及其問題——以馬烽和《韓梅梅》為例」82頁。関連して以下のものも参照。王永洪「朦朧的群像——20世紀中国児童文学人物形象論」（『北京師範大学学報（社会科学版）』1999年第2期）、黄蕾「業余写作、教育革命与“時代話語”的限度——以《接班人》為例的考察」（『現代中文学刊』2016年第2期）。
- 18 馬烽「關於『韓梅梅』的復信」（『文芸學習』1955年第7期）、いま、高捷等編『馬烽西戎研究資料』（中国現代作家作品研究資料叢書、文学史資料滙編中国現代文学史資料滙編（乙種）。山西人民出版社、1985）65頁。
- 19 楊健『中国知青文学史』（中国工人出版社、2002）11頁。
- 20 『中国農墾』なる雑誌の1955年第13期には、1953年の2月に、浙江省東陽県の国营農場に、大よろこびで配置されて来た21歳の「養猪姑娘」華銀鳳のことが紹介されている。また同誌の1958年第11期には、「養猪姑娘」孫桂清のことが紹介されている。

